

マイケル・ジャクソンはなぜ「エイリアン」なのか？

田 中 公一朗

導 入

マイケル・ジャクソンはエイリアン，宇宙人なのだ。彼は排除されるべきモノとして異端視された。「人間」ではないからだ。ではどういうことか？ ステップを踏むように手短に，しかしポイント（ポワント）を逐一確認しながら進んでいこう。

基本的な目標を2つ設定したい。マイケル・ジャクソンはきわめて曖昧な領域にいた人であることと，マイケル・ジャクソンのダンスはロシア（ソ連）に源があること，それをスケッチすることの2つだ。この2点は相互に関わっていると思われる。

展開のその1 MJの時代の背景を確認

マイケル・ジャクソン（1958-2009），アメリカ，インディアナ州ゲリー生まれ。まず彼，しばしばMJと表記される彼を取りまいているコンテキストを，簡略に見渡してみよう。当時のアメリカ合州国はどのような国家であったのか。

1950年代の後半は，まずは米ソの対立という冷戦構造の真っ只中にあった。スターリンの死去が1953年，スプートニクの打ち上げ成功が1957年。ベルリン危機が1958年，キューバ危機が1963年。これらは政治的な主題だ。第三次世界大戦が現実的にイメージ可能であった。

一方、アメリカ社会は車メーカー，とくにビッグスリーを中心に産業界は好調な時代であり，

鉄鋼，繊維産業は栄え，映画やミュージカル，スイングジャズといったエンタテインメント産業が最高潮を迎えた時代であった。アメリカに「郊外」が出現し，電化製品が完備された生活が理想とされた。教科書的に言えばそうなるだろう。

その反面で，アフリカ系アメリカ人（当時の言葉では「黒人」や「ニグロ」となる）の権利問題が少しずつ理解された。抑圧されている女性というフェミニズムの起源もこの時代かあるいはその直後にある。端的にいえば，アメリカ社会の内部には矛盾があった。自由と平等の理想国家，アメリカ。世界で最高の国家，アメリカ。地上の楽園はまもなく訪れるであろう！ しかし，それは一面の事実でしかなく，多くの権利の限定や制限があった。そして巨大な悪であり敵である共産主義者たちが存在した。それは第二次世界大戦後のマッカーシズム（マッカーシズム）に代表されるような，内部にスパイ，間諜，内通者がいるのではないか，という疑惑の眼も同時にあったということだ。マッカーシズムは1948年からの数年間にまるで疫病のようにして起こった。

ひとつだけ別の例を挙げよう。当時の映像メディアである。1950年代のアメリカの映画，またテレビのシリーズで集中的に撮られた主題として，宇宙や宇宙人をあげていいたろう。それ以前の pulp・フィクションがより洗練され，現実度を増したのだ。『禁断の惑星』（1956年公開）や『ロボット大襲来』（1954年公開，原

題, “Target Earth”)などがそれだ。宇宙人やロボットが、人類というよりもアメリカ人を攻める、それを防衛するアメリカ人とエイリアン(=外国人)との対決というパニック映画が実に数多く撮影された。この流れが『スター・ウォーズ』や『マトリックス』につながるのだが、いまは話題がそれるので示唆するだけにとどめる。

音楽状況も一瞥を加えておこう。ミュージカル・コメディがミュージカルとして自立し、ブロードウェイがダンスの一大中心地になった(トニー賞が作られたのは1947年)。アーヴィン・バーリンやスティーヴン・ソンドハイムが次々に作品を発表するのがこの40年代後半から50年代だ。またレナード・バーンスタインがニューヨークフィルの音楽監督に就くのは1958年(その前はギリシャ系のミトロプロースが首席指揮者)。ブルーズではデルタ・ブルーズが生まれ、また録音(もちろんSP盤)されるのがこのころ。ジャズではビッグバンドの隆盛が終わりかけ、モダンジャズがまさに生誕するころ。エルヴィス・プレスリーの人気のピークは1950年代中ごろと呼ぶこともできる。

ニューヨーク・シティー・バレエ(NYCB)が創設されるのが1933年、アメリカン・バレエ・シアターはその6年後。戦後になりこちらも繁栄期を迎える。

そのような政治、経済、そして一部しか振り返っていないが音楽やダンス状況の中で生まれた人、それがMJ、マイケル・ジャクソンだ。上記の背景はこの文章の最後尾で再び登場する。

MJの音楽

本来、音楽とダンスを分割することは難しい。音楽が労働歌や宗教と関連する中で機能し、また生まれたのであれば、舞踏的な側面や身体的な側面を音楽はともに含み、含まれる。とはいえ、ここではそこを無理にプラトンの引き裂かれた人間の比喩のようにして、二分割してみよう。そのほうが話の展開は明確になるからだ。

MJの音楽的なデビューはよく知られているように、ジャクソン5という兄弟のグループのリードヴォーカルとしてである。しかしそこに至るまでに多くのエピソードがある。それはエピソードというよりも、MJが置かれた時代を背景として生じるものだ。

まずは彼の父と母の存在はとても重要だ。これは比較的よく知られている。とくに父のジョセフ(ジョー)は彼ら兄弟姉妹の才能を見つけ、また「ステージパパ」として最大の功労者だ。同時に、子どもころという遊びたい盛りに、楽器やハーモニーの際限のない練習という厳しい音楽的なトレーニングを行なったことで、マイケルには厳父と映ったようだ。少なくとも本人はそう強く思っていたことが伺われる。

当時の生まれ故郷のゲーリーは、鉄鋼業が盛んであり、まさに父ジョーはUS Steelに勤めていた。だが、父は仕事を辞め、トレーナー的な位置に立つ。そして比較的是やく地元で有名になる。このころの「黒人」が、なんらかの社会的成功を得ることはとてもむずかしかった。数少ないチャンスのひとつがこのように音楽を通じて世に出ることであったので、当時、「黒人」の若年グループのデビューというのはひとつのレコード業界の流れであった。必ずしもジャクソン家だけが目立ったわけではないことには注意を喚起したい。

流行の曲を振り付け付きで歌う。コンテスト

に出る。レコーディングしたテープをレコード会社に送る。こういったことがラジオやテレビ、またレコードデビューへの道であったのだ。たとえばテンプレーションズやシュープリームスが好適な例だ。

さらに流行していたのは「ソウル・トレイン」といった有名番組で、車の都、デトロイトのモータウンレコードからデビューしていたステイヴィー・ワンダー、アイズレー・ブラザーズ、またジェームス・ブラウン、ジャッキー・ウィルソンといったところが有名であった。

そんな背景の中で、プロデューサー、ポップ・テナーが彼らの能力を高く買い、モータウンへ紹介する。後から見れば不当な契約を結ばされているものの、ジャクソン兄弟の活躍はここからはじまる。（『帰ってほしいの』、『ABC』）。この際のMJ、いやジャクソン5のプロデューサーは、「敏腕」で「悪辣」とされるベリー・ゴールディーである。

その後、マイケル・ジャクソンは、映画、『Wiz』（シドニー・ルメット監督、ダイアナ・ロス主演、1978年公開）に出演することになる。『オズの魔法使い』を「黒人」が演じたミュージカル映画に、重要な役柄「かかし」として登場する。

おそらくここまでのMJは、1人の優れたポップソングの歌手であり、また「子どもながら、ラヴソングが歌える異能を持つ有名な歌手」として認識されていたのだろう。しかしこの映画の撮影の中で、彼は音楽アレンジャーのクインシー・ジョーンズと出会う。クインシーはチャーリー・スモールズの原曲を活かし、またオーケストラ部門の一部を担当していた。

展開のその2 マイケル・ジャクソンとダンス

MJはなにがきっかけでここまで大きくなり、世界でもっとも知られ、またもっとも売れた

ミュージシャンになったのか。いまからすれば、それは突然の死だろう。だがそれは現在から見ればそのように断定できるのであって、それ以前から彼の一挙手一投足が報道され、画像に撮られる存在であった。では、なぜそうなりえたのだろうか。それは彼がダンサーであり、MTVやPV（プロモーション・ビデオ）という媒体をはじめ、そしてフルに使いこなしたからだ。たしかにMJは一方ではキング・オブ・ポップの称号で呼ばれる。しかし、その呼称から脱落してしまうのは、稀有のダンサー、という面だ。MJはキング・オブ・エンタテインメントであったのだ。

MJのダンスでとくによく知られたものは、ムーンウォークだろう。これは彼の生前の自伝のタイトルにもなっている。それから、重力に反したように傾いた動きができるブーツ。高速のスピニング。股間を強調する振り付け。両脚のつま先立ち（バレエでいえばポワント）。

彼のビデオ、たとえば、『スリラー』（ジョン・ランディス監督）や、PV（『Beat It』、『The Way You Make Me Feel』）のダンス、とくに群舞部分を見ると、どうしても連想してしまわざるをえない作品がある。それは『ウェストサイド物語』（映画、ロバート・ワイズ、ジェローム・ロビンス監督、1961年公開）だ。そして、ポップ・フォッシーの振り付けだ。

ロバート・ワイズは『砲艦サンパブロ』『サウンド・オブ・ミュージック』のようなミュージカル映画から、『ヒンデンブルグ』『スタートレック』まで撮ってしまう、多能な映画監督だ。もう1人の監督のジェローム・ロビンスは、誰であろう、彼自身がダンサーであり、ミュージカルの振り付けをした張本人であった。ちなみに彼はユダヤ系移民であり、またマッカーシーイズムとも関係しているがいまは触れない。また彼が属したアメリカン・バレエ・シアターは、

ロシア（その後ソ連）のボリショイバレエ学校を卒業し、後にディアギレフバレエ団に加わったミハエル・モルドキンの弟子たちからなる。

さらに彼、ジェローム・ロビンスが理想としたのがダンサーのフレッド・アステアであり、またロビンス自身が、ジョージ・バランシンとともに1950年代にともに作品を作っている。そのフレッド・アステアに憧れてダンスをはじめたのがボブ・フォッシーという連鎖だ。

ではこのジョージ・バランシンとは誰かといえば、それは現在のニューヨーク・シティー・バレエ団（NYCB）を創設した、ロシア、サンクト・ペテルブルグ出身のバレエダンサーで、またコレオグラファーだ。ユダヤ系アメリカ人のリンカーン・カーステンから請われてアメリカに来て、NYCBを立ち上げている（1933年）。

そして、マイケル・ジャクソンの自伝は、上記のフレッド・アステアに捧げられている。一葉の写真とともに。

話が複雑になりそうなので、簡略化しよう。アメリカのバレエ、ダンスの基盤はロシア系の人たちによって作られているということだ。そしてそれはミュージカルの振り付けについても言え、その流れがMJにもフレッド・アステアをトランジットして流れ込んできている。

ロシア・バレエがアメリカのミュージカルを作った。パリのバレエでもなく、またユダヤ系だけで作ったわけでもない。もっと表現を強調すれば、「バレエ・リュス、ディアギレフの遺産がブロードウェイミュージカルなのだ」。

音楽面では、フレッド・アステアとも協働したジョージ・ガーシュイン（ロシア系移民）、ロジャース&ハマースタイン（東欧系）、ステイヴン・ソンドハイム（ユダヤ系）が、とくに重要で実際によく聴かれた作品を作っている。ちなみに、ミュージカル映画を年間に何本

も作ったMGM自体も、ポーランド系とロシア系の移民の2人から成る映画会社だ。

いまはその方向に深く立ち入らない。またなぜロシアや東欧であのような野生的で粗野で、同時に洗練されたバレエと音楽が誕生したかにも触れる余裕が残念ながらない。しかし、西ヨーロッパに対して、ロシアやハンガリー、トルコ（オスマン帝国）はつねに文化的な発想の供給源であったことを提示しておくのにとどめたい。その背後に、ウクライナ、グルジアといった巨大な文化の揺籃の地があることもいまは置いておこう。

さて話をフレッド・アステアとMJの関係にぐっと戻そう。フレッド・アステア（1899-1987）、本名フレデリック・アウステルリッツ、父母ともにドイツ系移民）。彼はいまや忘れられかけているが、しかし、決して忘却されてはならないダンサーであり、歌手であり、また俳優だろう。

MJのダンスは直接的には、ジャッキー・ウィルソンがその起源や、参考元になっていると思われる。それはジャッキー・ウィルソンの声がテナーであって、声を強く押し出すタイプの歌手ではないことから来ているといえそうだ。その点はMJとよく似ている。ターンや、摺り足（スライド）の場合、ジェームス・ブラウンの足さばきは、もっと荒々しい。

そして、MJが影響以上のものを受けたのが、アステアであると言えるだろう。MJが、「成功」の後自宅に映写室を作り、頻繁に映画を見ていたことはよく知られている。その中に、アステアの数々のミュージカル映画が含まれていたのは疑いようもない。これはMJの『自伝』の中にも名前を挙げる形で書かれているが、総合的なエンタテインメントを目指したという点で、MJは畏敬の念さえもったのだろう。

いや、もっと言うと、MJの初期PVには、アステアの影や残像がいつも見え隠れする。ア

ステアの気品や、ユーモア精神、ただ直立していても姿として決まってしまう、というような点だ。ポーズを決めて静止する点だ。帽子や手袋といった小物が直接の影響かどうか、本人は必ずしも肯定しないにせよ。

まとめてみよう。MJはふたつの方向からロシア、あるいは東欧の影響を受けている。ひとつはミュージカルダンス自体がロシア起源と言っていいことがひとつ。もうひとつは、他のアフリカ系ミュージシャンを模倣しつつ、しかし究極的には、ドイツ系のアステアのような踊り方、きわめて洗練された踊りをMJは志向したのだ。フレッド・アステアこそが彼の精神的メンターであった。

MJの音楽2 ザ・ピーク

ここまではジャクソン5というMJの兄弟と共の活動と、MJのソロ活動を同じように扱ったが、いよいよマイケル・ジャクソンが、「彼本人」になる時期が1979年にやってくる。端的にいうとクインシー・ジョーンズがプロデュースをはじめたのがこの頃だからだ。

前出の『Wiz』以外でもクインシーはさまざまな活動を幅広く行なっていた。ジャズ・トランペッターとしてビッグバンドを仕切ったことから始まり、TV音楽、CM、映画、など実に多彩な方向を向いていた。

いったいなぜMJの『オフ・ザ・ウォール』、そしてその次のアルバム、『スリラー』がこれだけ売れたかというのは、アルバムそのもののクオリティーがきわめて高かった、ということが一要素ではあるだろう。

当時の最高のソングライター、バック・ヴォーカル、スタジオ・ミュージシャン、何十曲ものデモテープ。そこから生まれたMJ自体が跳ね回るような楽曲。

そして『スリラー』の場合は、ジョン・ランディス監督が撮ったということで、オチが明確につ

いた映画（MJは「ショート・フィルム」と呼ぶ）に出来上がった。ここに、あのゾンビたちによる有名な群舞シーンが含まれる。MJは自らを狼男と位置づけ、そして、ゾンビたちとともにガールフレンドの悪夢の中で踊るのだ。事実、映像の最後の部分で、MJ自身が狼男であることが暗示され、フィルムは終わる。

この『スリラー』は、世界で1億枚以上すでに売れている。かつて最も売れたレコードアルバムである。そしていまも売れ続けている。

ここまでは、スーパースターの誕生という、実に輝かしき「成功」の物語だ。その後、同じくクインシー・ジョーンズのプロデュースで、『BAD』を製作、想像を絶するようなプレッシャーの中で発表する。この時代、1980年代の後半から1990年代の初頭がMJの社会的なピークと断言していいだろう。

現時点ではその最適な証明が、1992年の「ブカレスト・ライブ」DVDである（公式の映像が実は多くない。これからの公開が待たれるところだ）。ソ連の崩壊直後のルーマニアに登場したMJが、圧倒的なパフォーマンスを繰り広げる。ここには、MJが持っている、アメリカ的な要素、実は既に述べたようにロシア起源でもあるのだが、そのダンスが披露される。また一方で、アフリカ系の音楽の現代化されたものが繰り広げられる。そして狼男、人狼、ベルセルクのひとつの「本拠地」であり、またゾンビ的に復活するドラキュラの地、トランシルヴァニアを擁するルーマニアの地、そこで人々が熱狂しないはずはない。

そしてMJに本当の独創的な点があるならば、それは彼の「叫び」である。「ダッ da」「フーッウー heewuhhh」という、小節の合間に入る叫びというMJのシグニチュアだ。

MJの愛と死

その後のマイケル・ジャクソンについてはむしろよく知られていると思われるので、この短い文章のなかでは一瞥するにとどめよう。

一方ではこうだ。

マイケル・ジャクソンは、生ける伝説と化し人々を興奮の渦に巻き込む。真のスーパースター。マドンナもプリンスも及ばない場。これが1990年代を通して続く。

しかしもう一方のほうのほうが遥かに強まる。

猿などのペットを必要以上に重視している。少年愛疑惑（ほぼ否定していただろうと思われる）。たびかさなる整形の噂。白人になりたがっているとの継続的なゴシップ（これは自己免疫疾患であることが一応はっきりしている）。ネヴァーランドという広大な敷地を購入し、子どもに戻った生活をしている。CM撮影時の大やけどからはじまった薬の服用。異常に神経質だろうという推測。CDショップや玩具屋、ディズニーストアを貸しきるという異常さ。

このような、各種の「異常な行動」だけがよく報道されるようになり、好奇の対象と化した。これが同時に起きていたことだろうといえる。

そのなかで、エルヴィス・プレスリーの娘リサ・マリー・プレスリーとの結婚といった、ファンを驚かせたことも挿入されてくる（その後離婚）。

MJに対する視線は、どちらかというと冷ややかなものとしてあり続けたのだと思われる。そして彼の死が契機となり、その否定的な見方は見事なまでに反転する。それが映画、『THIS IS IT』（ケニー・オルテガ監督、2009年）だ。

この映画の映像は、ミュージシャンとして貴重なものだ。なぜならミュージシャンはリハールを内輪の人たちにしか見せないからだ。観客が経験するのはいつも完成されたステージだ。

それが、その内輪の、ステージの作成過程が見れること。そして特筆すべきは、MJの日常的な言動が編集されたもとはあるが映像化されたこと。ここにこの映画の特異な性格がある。MJは身体の調子が万全ではないにせよ、MJの他者に対する気遣いや、ソフトな話し方、物腰、適切なアドヴァイス、ミュージシャンや、スタッフとの親密でユーモアもあるコミュニケーションが映っている。フィルム・ノワールへの好みから映像作成過程までも映像にされている。

MJは、死の8年前の2001年、講演をイギリスのオックスフォードで行なっている。きわめて稀なことだ。ここにはMJの内面の一部がはっきり出ている。この講演で表現される愛への渴望と、また愛を与えることは切り離せないだろう。

ここでマイケル・ジャクソンを一人の人として振り返ってみよう。

MJは、ジャクソン家に生まれ、ヴォーカル能力の高さから、リードヴォーカルとして子どものころより大人の恋愛を歌う。ソロになってから、彼は優しい声のトーンや振る舞いで、男性的なものを感じさせないが、ダンスでは下半身を突き上げるなど男性的要素も垣間見せる。

MJはダンサーであり歌手である。そして、モンスターや狼男であり、また「普通の人」でもある。「黒人」でありながら、「白人」になるという願望を持っていると解釈された。歌詞の内容はとても攻撃的なものが多いにもかかわらず、しかし歌い方はあくまでも優美である。彼はハードなロックも好んだポップスターであり、そしてR&Bの伝統上にいた。大人なのに、少年を愛していると誤解をされた。父を愛していたが、父から愛されることはなかった。

MJは様々な矛盾を抱えていた。社会的にも、そのように認識されていた。これを建築家の内

藤廣の表現を借りて、多矛盾的と呼ぶのがふさわしいかもしれない。単にさまざまに相反する要素を内面や外面に抱えていた、というだけではないからだ。その矛盾は相互に関連し、また支えあって、ミュージシャンでありダンサーであるマイケル・ジャクソンという特異な人が存在していた。つまり、彼はエイリアンとならざるを得なかった。アメリカニズムの中では、ある種、それが必然の要請であったのだろう。

そして彼、MJ のもっとも驚くべきところはこれだ。

一方ではアフリカ大陸からカリブ海を経て誕生した、ブルーズや R&B の流れを受け取り、そして次の世代に送り出した、そういう媒介者であったこと。

そしてもうひとつは、ロシアや東欧から生まれたダンスがアメリカという移民の地で発展した流れを、これも受け取り、そしてそれを次世代に送り出していったこと。

MJ はこのように、地理的に、世界規模の 2 つの弧がクロスした場所に生まれ、成長し、愛を持ってないまま、愛を贈りつつ 2 つの巨大な弧を発展させ、そしてこの世から身体的には去った。

そしてその死の年 2009 年にアメリカにはオバマ大統領というポスト多文化主義的大統領が生まれ、また GM とクライスラーというカーメーカーは実質的に破綻し、政府の支援を仰ぐことになった。

参考文献など

音源、画像

マイケル・ジャクソン名義の各アルバムや PV 集。特に『ONE』（PV 集）。『ブカレスト・ライヴ』（以上 SONY）

“Dancing fot Mr.B”, Kultur, 1989（バランシンのダンス画像集）

“Balanchine”, Kultur,（年度表記なし、これもバラン

シン作品集）

『ロボット大襲来』（ハーマン・ローズ監督、1954 年。

この辺りの映画は、当時のアメリカの雰囲気や、恐怖の対象を知るには好適だろう）。

書籍

Michael Jackson, “Moon Walk”, (1988) (MJ の自伝)
Fred Astaire, “Steps In Time”, !tbooks, HarperCollins, (1955) 自伝。邦訳あり。

Nelson George, “Thriller”, Da Capo Press (2010) 1980 年代まで、詳細な記録。

文藝別冊、『マイケル・ジャクソン』（2009）、河出書房新社

西寺豪太、『マイケル・ジャクソン』（2010）、講談社現代新書。概説的な本としてはいまのところ最適。ただダンスの面にはほとんど言及がない。

山本健翔、『フレッド・アステア』、メディア・ファクトリー、1992 概説書。写真が多い。

内藤 廣、『構造デザイン講義』（2008）、王国社

本文中の <http://www.allmichaeljackson.com/speeches/oxforduni01.html> オックスフォード大講演全文と録音。翻訳が上記の文藝別冊にあり。

なお、本稿は、駒澤大学、グローバル・メディア・スタディーズ学部の中でのゲスト講義のノートを拡充したものである。本講義で発表する機会を与えてくれた芝崎厚士講師に、最大限の感謝の意をあらわしたい。